


 巻頭言

真実 は ひとつ

 一般財団法人残留農業研究所 理事長 ^{はら}原 ^だ田 ^{たか}孝 ^{のり}則


「真実はいつもひとつ」は、アニメ漫画「名探偵コナン」の主人公である江戸川コナンの名セリフとしてよく知られているが、世界情勢を観るにつけ、はたしていつもひとつなのであろうかと疑問が湧いてくる。広辞苑によれば「真実とは嘘偽りのない本当のこと」と記されており、確かに真実はひとつしかないはずであるが、歴史上の出来事を事実としてとらえた場合、その観方・解釈は必ずしも真実を反映しているとは思えないことも多い。例えば、今年2月に勃発したロシア軍によるウクライナへの軍事侵攻はロシアにとっては親ロシア派住民を擁護するための正当な行為としてロシア国民に伝えられ、これに対しウクライナ側ではロシアによる不当な一方的侵略行為として国際社会に訴え西側諸国とともに強く反発している。今回のロシア軍の侵攻は第三者的に見れば、明らかに国際法違反の戦争犯罪であり許されるべきものではないが、ロシア国民には情報操作により真実が伝えられていないため、多くのロシア国民はロシア政府のプロパガンダを信じている。ロシア・ウクライナ間で戦争が起きていることは事実であるが、その解釈ではロシア側はネオナチからの祖国防衛のためと主張し、ウクライナ側はロシアによる一方的な不当な侵略に対する自国防衛戦争と位置づけている。どちらが正しい主張をしているかは自由に情報を入手できる日本や欧米諸国にとって明らかであるが、情報操作されているロシア国民にとっては真実を知ることが難しく、正しい判断ができず不幸である。いずれにしても多くの犠牲者が出ているので早く終結を祈るばかりであるが、同様なことは第二次世界大戦中にも起きており、それは「カティンの森事件」として知られる旧ソ連軍によるポーランド人虐殺事件で、1939年にポーランドに侵攻したソ連軍は旧ポーランド東部地域を侵略併合し、多数のポーランド人捕虜を虐殺した。しかし、ソ連はこの虐殺は当時同地域に侵攻していたナチス・ドイツ軍によるものであると主張し続け、真実を隠蔽しようとした。ただし、その後の調査によりポーランド人の虐殺をスターリンが指令した署名文書が発覚し、事件はソ連が実行者であることが50年後の1992年になってようやく判明・確定した。全体主義国家のような体制下では、そこに君臨する独裁者は自

分に都合のよいことのみを国民に伝え、不都合なことは情報操作により隠蔽する傾向にあるため、真実が国民に伝わらないことが多く、誤解による不幸が生まれ易い。戦争は当事者に悲しみと同時に憎しみを生み出す悲惨な行為であり、絶対に繰り返してはならないものであるが、有史以来紛争は民族間で絶えることなく繰り返し起きているのが事実であり、カティン事件から80年経った21世紀の現在においてもロシア軍による同様な戦争犯罪が再び勃発し、極めて残念なことである。特にロシアは国連の常任理事国であることから、その行為は狂気の沙汰であり、国連の再構築が必要であることを痛感させられる。国家間の紛争の原因は様々であるが、独裁者の思い込みによる誤った意向と情報操作によるプロパガンダに起因することが多く、特に独裁者の人間性と取り巻き布陣の質と多様性が失われた場合に紛争リスクが高まる。現代社会は情報社会で様々な情報がSNSなどSocial Mediaを介して提供されるが、その中で我々は常に正しい情報を見いだすこと、すなわち、ファクトチェックが極めて重要であり、正しい情報の下で物事の是非を判断する姿勢が平和を維持するために必要であると考えられる。世界平和を目指して2015年に国連サミットで採択された持続可能な開発目標（sustainable development goals：SDGs）を達成するため、現在193か国の国際社会が協力して推し進めているが、各国が互いの存在ならびに人間社会の多様性と人権を尊重し、武力ではなく、対話で物事を解決していく姿勢と努力が必要である。また、人類の生活圏が急速に広がり今や世界人口は79億にも達し、地球温暖化がますます進み地球レベルの気候変動の危機に瀕している。したがって、今や人類存続のみならず生物多様性および自然環境保護にも最大限尽力しないとこの地球上の生態系が崩壊してしまう恐れがあり、強い危機感を感じる。真の世界平和を達成するためには、我々人類が互いの存在・生命を尊重し、限られた地球上の資源を平等に分け合い、蓄積された知識・技術を共有し、「人は何のために生きるのか」を真剣に考え続けることである。